

## 内山さんからの再コメントへの応答

山泉 実

以下の議論は、内山さんに査読していただかなかっただけでなく、RFT の理論の根幹に関わる重要な意義を持つものでもありますが、いずれも論文で大枠が提示されている RFT の精緻化やバリエーションの可能性に関するもので、どの可能性をとるにしても、RFT の大枠は維持され、潜伏命題名詞句の分析には影響がないものと考えます。そのため、論文全体のバランスを考え、この文章の 4 について論文 2.3.3 後ろから 2 段落目に書き加えた以外は、論文本文には取り込みませんでした。

### 1. “Self-RF”

**内山** そもそも、私たちが自分自身に対して抱く信念が持つさまざまな認知的、言語的特性 (de se, immunity to the error through misidentification 等) を RFT はどのように説明するのか疑問に思いました。フレーゲの意義 (sense) に帰せられるような指示対象の与えられ方に訴えるのが一般的な方法かと思いますが、意味/意義の区別を否定する RF 一元主義的な RFT の立場においては、該当する RF (Self-RF?) が持つ特殊性によって説明することになるかと思いますが、ゆえに Self-RF は私たちが単にある (私たち自身をも含めた) 個人に対して持つ RF と何らかのかたちで決定的に区別される必要があるように思いますが、それはどんな区別でしょうか。

**山泉** レカナティの Mental Files 理論では、対象とファイル (の作られ方) の関係や情報のソース (エピソード記憶、proprioception 等) が大きな問題になっているようです。RFT はそこを重視する理論ではないので、今の所考えていませんが、認知機構の RFT 以外の部分で説明できるのではないかと考えています。言語的特性としてはどのようなものがあるのでしょうか。

※ファイルのでき方はファイルの中身とは関係ないと思っている。

※self ファイルは、作られ方、書き込む・呼び出す方法などに差があるかもしれない。本人ファイルにしか入らない内容特徴はある (痛みなど?)。検討すべき現象待ちの状態。

**内山** 「レカナティの Mental Files 理論では、対象とファイル (の作られ方) の関係や情報のソース (エピソード記憶、proprioception 等) が大きな問題になっている」のは、ファイルがそれらの関係によって個別化され、さらにそれは対応する表現の (広い意味での) 意味を決定するものだからかと思えます。すなわち、ファイルそのものがフレーゲのいう sense、すなわち指示対象の与えられ方/捉え方に対応するものとされているのです。これによって説明できるようになるのは、例えば“わたし”

という言葉が持つ次のような意味です。我々がこの表現を用いてある性質を自らに述語づけるとき、我々はその性質をまさしく自分自身のものとして捉えており (*Attitude de se*)、それは単に我々がそれであるところの人物の性質として捉えること (*Attitude de re*) とは異なるでしょう。この特徴こそ *Self-thoughts* がもつ認知的特徴 (上記コメント参照) および言語的 (意味論的?) 特徴 (*Castañeda* のいう *Quasi-Indicators* あるいは不定詞における *PRO* で表されるような特徴) の根底にあるものといえるかと思えます。

さらにこの特徴は *OIC* の観点からも重要ではないでしょうか。“わたし”という表現を使って何かを述べる時、それは単にある性質を自分に述語づけしているのではなく、*self-ascribing* しているのだということも伝達されるべき大事な要素だと思われるからです。したがって、そうした情報は *RFT* の解明すべき表現の意味に関わるものではないでしょうか。だとすると、それは *RF* 外部の認知構造によってではなく、*RF* 内部の、具体的には *Self-file* のもつ概念構造上の特徴から説明する必要があるように思えます。逆にいうと、このような含意を *RF* 外部の認知構造や語用論的な推測に委ねるとした場合、それは“わたし”という言葉が持つ意味の重要な部分を明け渡すことになるのではないのでしょうか。

#### 山泉 (再応答)

*Self-file* の特徴を強いて挙げるとすれば、無標の位置付けにおいては、*ID* が常に定項であるという特徴がありそうです (*immunity to the error through misidentification* に関係がありそうです)。また、痛みの質のような感覚的な情報も *self-file* にしか入らなそうです (Cf. フレーゲの *Dr. Lauben*)。もっとも、上記のような特徴が一人称代名詞の意味として意味論で扱われることがあったとしても、それを *self-RF* の特徴として扱ったり、一人称代名詞の持つ意味 (概念構造インタフェース制約として直接コード化されている情報) として扱ったりすることには、当面の方針としては採用しないつもりです。記述的には間違いではないとしても、深い説明としては問題があるからです。

そもそも、そのような特徴を一人称代名詞の持つ意味や *self-file* 自体入れるのは、表現で伝達され得るあらゆることを分解して、表現のどこかに分担させるという発想 (コードモデルによくある発想) に思われ、*RFT* の *OIC* の認知的視座とは方向性が異なります。しかしそうすると、*NP* の意味は *RF* に尽きるという、*RFT* の主張と齟齬をきたすのではないかと思われるかもしれませんが、問題の特徴は、そもそも *NP* の意味や *self-file* の特徴ではなく、より根本的には (まだよく考えていませんが)、認識論的構造や形而上学的構造のようなところ由来するものであるように思えます。大枠としては以上の方向性で、*de se skepticism* に属する立場だと思えます。

細かい点については、*RFT* の分析によって、*de se* の特異性が解消することもありそうです。*RFT* が *de se* の問題をどう扱うかの例として、有名な *Perry 1979* の例を分析します。

I once followed a trail of sugar on a supermarket floor, pushing my cart down the aisle on one side of a tall counter and back the aisle on the other, seeking the shopper with the torn sack to tell him he was making a mess. With each

trip around the counter, the trail became thicker. But I seemed unable to catch up. Finally it dawned on me. I was the shopper I was trying to catch. (p. 3)

A successful account of de se thought ought not merely to explain what it is that Perry learns when he learns that he himself is making a mess. It must also explain the fact that Perry is able to easily communicate this information to others. *About Oneself* (p.19) [OUP Oxford. Kindle 版. 以下もこの本から]

これについての問い 1 : is there, as appearances suggest, some new piece of information that is learned that leads Perry to change his behavior and adjust the bag of sugar in his shopping cart?

RFT の答え : Yes.

問い 2 : And if so, then how is this new information best characterized?

RFT の答え: 気付く前には、次のような RF が Perry の心にあった。

ID x @Perry; 内容特徴 x は砂糖をこぼしている

ここで、x は未同定だが、自分は同定されているので、 $x \neq a$  という想定が暗黙に成り立っているところがポイントで、自分だと気付いた時、暗黙の想定は破棄され、ID x を Perry RF の ID で定めるという変化が Perry の心で起こった。

問い 3 : If Perry's belief that he himself is making a mess is distinct from belief in the traditional proposition that John Perry is making a mess, then what does he communicate to his fellow shopper when he tells her that he is making a mess?

RFT の答え : まず、Perry's belief that he himself is making a mess と belief in the traditional proposition that John Perry is making a mess の違いについて言えば、時間に関係なく belief を比較しようとするとうちがわからなくなってしまう。違いを特徴付けるには、各人の心に相対的な RF とそこに起こった変化を考える必要がある。the traditional proposition that John Perry is making a mess は、@に中立的な、P is making a mess ということになるが、Perry が気付いた情報はこれでは特徴づけられない。上で書いたような、Perry の心における変項を定めたものとして特徴づける必要がある。結局、Perry が気付く前と後に抱いた信念を敢えて命題の形で表すなら、違いは、主語が自由変項か定項（自分）かにある。

これらのことを考えずに、信念を単なるラッセル的命題と考えると以下の問題が生じる。

According to the Russellian view, propositions are structured entities consisting of an individual and a property. The proposition that Perry is making a mess is a structured entity consisting of Perry and the property of being an individual who is making a mess. When Perry sees the messy shopper in the mirror and believes of him that he is making a mess, Perry's belief is about Perry, and, on the structured propositions account, the content of Perry's belief is the structured proposition consisting of Perry and the property of being an individual who is making a mess.

When Perry has the belief that leads him to adjust the bag of sugar, his belief is also about Perry and is also the structured proposition consisting of Perry and the property of being an individual who is making a mess. So, on this account, the content of Perry's belief is the same when he believes of the man in the mirror that he is making a mess and when he believes that he himself is making a mess and bends down to adjust the bag of sugar. But claiming that the content of Perry's belief is the same in both cases seems like the wrong result, or at least not the complete story. First, the latter belief leads to a change in behavior: Perry bends down to adjust the bag of sugar that is spilling. Second, it seems correct to say that Perry learns something new when he learns that he himself is the messy shopper. Taking the content of belief to be the same proposition in both cases is, by itself, unable to explain these two facts. *About Oneself* (p.514). OUP Oxford. Kindle 版.

問い4 : what does he communicate to his fellow shopper when he tells her that he is making a mess?

RFT の答え : 複数のケースが考えられるが、1つは、彼が気付いたこと ( $x \rightarrow \text{Perry}$ ) と特に違いはなく、彼が気付いたことを聞き手が Perry の心に起こったこととして理解するだけ。別のケースは、その気付きは無視して、単に Perry が make a mess したということだけを伝える。この場合、Perry file @聞き手に P made a mess が加わるだけ。

次の例についても、de se belief という特殊なものを認める必要はない。信念はカプラン自身も聞き手も Kaplan's pants are on fire という同じもので、それと組み合わせて後の行動につながることになる想定 (*Kaplan is myself or Kaplan is the speaker*) が違うだけと考えます。

It seems eminently plausible that differences in behavior are explainable in terms of differences in belief. Kaplan's utterance of "My pants are on fire!" is followed by different behaviors on behalf of the speaker and the hearers: Kaplan stops, drops and rolls, and the rest of us run to get a fire extinguisher. *About Oneself* (p.1524). OUP Oxford. Kindle 版.

## 2. 定項 ID を持つとはどういうことか

内山 ここで念頭におかれているケースからは外れるかもしれませんが、RFT において「明けの明星は宵の明星である」というような同一性言明の意味はどのように理解されるのでしょうか。内在主義的な観点からすると、それは概念世界内部の構造における関係として捉えられ、それぞれの名詞に対応する RFa, b が等しいものとして結び付けられ統合されるということでしょうか [山泉 yes]。そうした場合、外部世界の指示対象に訴えずに、どうやって二つの異なった RF の同一性を説明するのでしょうか。

山泉 「外部世界の指示対象に訴えずに、どうやって二つの異なった RF の同一性を説明するのでしょうか」「説明」の解釈に少し自信がないですが、下のコメントにあるように、「RFT はその記述的な姿勢から、そのような説明には関与しない」ということになる。記述としては、心の持ち主が

いろいろな情報を元に 2 つの RF が同一の対象に対応すると判断した結果、2 つの RF が 1 つの ID の RF に統合されるということで捉えられます。

---

“人間は同定されていない対象をも概念化して、他の対象と区別し、追跡することができる”

(論本文 2.3.3)

---

**内山** 上の問いと重なるかもしれませんが、ここで言われる同定されている/されていないの違いはどのようなものか、RFT はどのように説明するのでしょうか。定項、変項の違いというのは、RFT 用語へのいわば翻訳で、説明ではないように思われます [山泉 yes]。分析哲学の用語では、両者は singular thoughts/descriptive thoughts の違いに対応するかと思います。両者は大まかに言って、それぞれに固有の対象の与えられ方/把握のしかたに根差しているため (acquaintance の場合厳密には対象の与えられ方の一種とはいえないかもしれませんが)、これは対象が同定されている/されていないというのがどういうことか説明しているといえます(それが成功しているかどうかは議論の余地がありますが)。しかし、RFT のように、意義すなわち対象の与えられ方を言葉の意味から排除する立場にたった場合、このような違いをいかに説明できるのか疑問です。あるいは、RFT はその記述的な姿勢から、そのような説明には関与しないという立場をとるのででしょうか [山泉 yes]。

**山泉** 同定されている・されていないは RFT 自体の問題というよりは、それを基礎づける認知科学の問題と考えています (RFT は、現段階では、言語の記述に役立てることを重視しています)。ジャッケンドフを受け継いで、心の仕組み全体・認知科学と接続して、そちらで考えてほしいと思っています。

生まれる前に死んでいた有名人の RF などは、人から聞いたことだけを元にして、いつの間にか (ワーキングメモリに何度目かに構築されたある時から) 変項から定項になっている気がします。そのため、対象の与えられ方/把握のしかたの質的な違いに定項・変項の区別を求めることは難しいと思われます。

変項の RF も、以下の場合を考えると、純粋な記述とは異なると思われます。太郎を殺した犯人 x の RF ができる → 事件の調査が進んで、RF にいろいろな内容特徴が付け加わる → 太郎は自殺と判明して、x は犯人でないことがわかる → ID x のままで null にはならないが、x が太郎を殺したがない RF になる (最初の RF と最後の RF は、記述だとしたら同一性がない)。[※追記 犯人がいなかったことがわかった時、RF の ID が x から null になるのか x のままなのかは場合による。]

ただし、ID null 値のものは、記述的かもしれません。ID が null 値の場合、内容特徴をどんどん変えることはできないからで、そういうものは内容特徴ではなく、対象の同一性を規定するものであり、存在論的範疇がモノでも内容 ID を持つと考えられます。[※追記: コト RF でも null 値になった時は、内容 ID の内容を残す必要がある。]

内山 「同定されている・されていないは RFT 自体の問題というよりは、それを基礎づける認知科学の問題と考えています」ということですが、そうした認知構造の働きの結果として現れる定項 IDRF と自由変項 IDRF の違いとは結局何なのか説明する必要はあるのではないのでしょうか。

例えば、「生まれる前に死んでいた有名人の RF などは、人から聞いたことだけを元にして、いつの間にか（ワーキングメモリに何度目かに構築されたある時から）変項から定項になっている気がします」ということですが、これは一体どのような変化を指しているのでしょうか。もちろん、それは対象が同定されているかいないかの違いということになるのでしょうか、この例のように acquaintance の可能性がない場合、対象が同定できるようになるというのがどういうことなのかいっそう明らかでないように思います。自由変項 IDRF の場合でも「他の対象と区別し、追跡することができる」わけですから、対象を同定できるというのはそれ以上のことを含むと思われそうですが、それは一体何でしょうか。

### 山泉（再応答）

RF の ID の定項・変項の区別は、適応的であったから生じたにすぎない進化の産物であるため、極端な場合には客観的にはどちらか判別し難かったり、一貫性を欠いている場合があるだろう。もしかすると進化的には、定項 RF は一定の接し方が適当な対象の RF に由来し、自由変項 RF は、探し求めたりしている対象の RF に由来するのかもしれない。現代においても、対象の把握・接し方の 2 つの様式として定項 ID の RF に対しての把握・接し方と自由変項 ID の RF に対しての把握・接し方があると考えられる。この態度の違いについては、後述するが、RFT の射程を超えている可能性が高い。

「対象を同定できる」か否かということは、客観的には区別できないことがある。生まれる前に死んでいた有名人の場合がその一例である。（もちろん、自由変項 RF から定項 RF になりやすくなる要因はいろいろ考えられる。定項 RF に結びついている者、例えば、佐藤信夫は私にとって定項のテクストの著者として導入されたので定項になりやすかった。簡単に言うと体験の豊かさ（田中太一 p.c.）が要因として考えられる）。知覚できるものでさえ、少なくとも眼前にない場合には定項 ID が与えられていない場合もあると考えられる。たとえば、1 ペアの耳栓をいつも持ち歩いている人が、ペアを形成する 2 つを少なくとも耳に付けていない間は区別しないとしたら、耳栓 1 つ 1 つに定項 ID を与えているとは考えがたい。同様に人間についても 1 人 1 人に定項 ID を割り当てて区別しないことは考えられる。例えば、いつも補助してくれる一卵性双生児がいた場合。

同定されている・いないは、サブパーソナルなレベルの記述としては、RFT において ID が定項か自由変項かで記述される。残るはパーソナルなレベルでどう違うかで、ここは RFT の射程を超えているものの、哲学・言語学で関連する議論を探すと、野矢 2019・佐藤 2020 の「個別性」の違いがそれにあたる。

“同じ特徴をもっていれば他のものでもかまわないという一般性の態度と、これじゃなければだめなんだという個別性の態度はまったく違うものです。[...]単純には動物は一般性のレベルだけで生きていて、

人間は一般性のレベルだけではなくて個別性のレベルでも生きてると、きっぱり分けたいところですが、いまは予想される反論に譲歩してグラデーションをつけましょう。” (野矢 2019: 138-9)

個別性の態度の典型的なものは、対象に対して「かけがえの無さ」を感じるというものである。野矢の「かけがえの無さ」があることは、同定・定項 RF を持つことの必要条件ではないが十分条件であると考えられる。以下のように、「かけがえのなさ」が先で、そこから大事に思う気持ちが引き算されて個別性が得られるという図式—“個別性=かけがえのなさ-だいに思う気持ち” p. 140 があるからである。つまり、“個別性のレベルがまず成立し、それからそれをだいに思うことで「かけがえのなさ」が成り立つ”のとは逆で、まず、「かけがえのなさ」という意識があり、特に大事ではないものに対しても固有名詞を用いて個別性の態度で接するようになるのはその後であるとされている。

ただ、ここで固有名詞の使用は必要ではないと筆者は考える。野矢は、「私は、個別性のレベルが成立するためにはあくまでも固有名詞の使用という言語活動が必要だと考えているので、固有名詞を使わない動物たちには個別性のレベルは成立していないと言いたいのですが、そう断言できるかまだ自信がないので、いまは控えておきます。」 p. 139 と述べている。一方、佐藤は、「野矢 (2011) は固有名とは対象につけられた名前ではなく関心につけられた名前であると述べ、酒井 (2012) もこれについて引用している。本稿はその「関心」は一様なものではなく固有名に限ったものではないと主張する」 p. 233 と述べている。筆者はこの点については、佐藤に同意する。

また、野矢 2019 の議論は、RFT でいう [+token] の場合に限られるが、佐藤 2020 は、野矢の議論を一般的なカテゴリー (RFT で言う [-token] の ID 定項) の場合にも拡張していて、“個別の対象のみならず、この「かけがえのなさ」は一般的なカテゴリーにも伴うものであると考える。” p. 233 とする。一般的なカテゴリーは、かけがえの無いものの典型にはならないかもしれないが、筆者もこれに同意する。定項 ID の RF の対応物の典型はかけがえのない個体だとしたら、自由変項 ID の RF の対応物の典型は探し求められる対象だろうか。

さて、個別性の有無が言語現象に反映されていれば、話は簡単になるのだが、そのような現象は見つかっていない。ただ、かけがえの無さの有無が反映されている現象が佐藤 2020 で論じられている。かけがえの無さの不足・欠如によって不毛なトートロジー (酒井 2012、佐藤 2020) になるとのことである。次のような例が考えられる。

不毛 (誰か知らないが) この字の筆者はこの字の筆者だ。

不毛 3は3だ。

不毛ではない 佐藤信夫[※筆者が知覚する前に死んだ有名人]は佐藤信夫だ。

名詞句によるトートロジーが不毛にならなければ、その名詞句に対応する RF の ID は定項であるということと言えるのではないか。

今後の進展の可能性としては、一つは、長期記憶で ID 定項と自由変項の区別の説明が与えられる可能性がある。もう一つは、概念世界の構造で上で問題とした違いを説明する道も考えられる。つまり、概念世界の構造を探求する認知形而上学においては、ID 定項の対象と ID 自由変項の対象の区別という、普通の形而上学にはない区別があり、RF にはその区別が反映されるということで、認知形而上学的対象へのアクセスの仕方が違うということになる。もともと、これでは、対象の“与えられ方”が対象への“アクセスの仕方”に変わっただけになる可能性はあるが、与えられ方（誰が与えてくれたのか？）よりは理解しやすいと思われる。今後、世界や長期記憶とのインターフェースをはっきりさせないと、どうにも言えないことが多い。

酒井智宏 2012. 『トートロジーの意味を構築する』くろしお出版.

佐藤らな 2020. 「トートロジーとかけがえのなさ」『東京大学言語学論集』42: 223-238

野矢茂樹 2019. 『そっとページをめくる』5-2. 岩波書店.

### 3. モノ RF でも記述をその ID とすることは可能か

内山 他方、ジグソーパズルや犯人の例のように acquaintance の可能性がある場合は、この違いおよびその移行が一見うまく出来るように思いますが、その際はやはり RF とその対象との関係を参照することになり、RFT の内在主義的立場からは許容できない説明になるでしょう。

また、記述との関連ですが、例として用いられたケースを見る限り、確かに変項 IDRF を記述的に解釈することはできないようです。というのは、当該のケースにおいてある人物 x は発見された物証その他の出どころとして、犯人 RT と結びつけられていると考えられるからです。すなわちここでは指示が記述によってではなく、因果関係によって固定されていると思われます。では、その逆の場合はどうでしょうか。

例えば、ある RF が“ジッパーを発明した人物”という記述によってその対象に固定されているとしましょう (Evans のいう Descriptive Name に相当する記述の用法)。その場合、恐らく該当する RF は (出来事 RF と同様に) 内容 ID、すなわち記述的な ID を持つとされるのではないのでしょうか。そうだとすると、RFT において descriptive thoughts は内容 ID を持つ RF に対応すると仮定できるの用に思います。

しかし、以下のコメントによれば、内容 ID にも定項変項の区別があるということなので、ここでもまたその ID が定項を持つのか変項を持つのか、またその違いは何を意味するのかという問題が出て来るように思われます。また、以上の議論は該当する RF の ID が null 値であることを求めるものではないので、同定されているされていないとを問わず、対象を持つモノ RF でも記述をその ID とすることは可能であるように思われます。



### 山泉（再応答）

内容 ID の出来事 RF で ID が変項のものは、例えば、「太郎が日本に帰ったら最初にやりたいこと」で表されるようなもので、ID が定項になるのか自由変項になるのかは、モノ RF の場合よりも客観的には決めがたいと思われる。松阪の一夜は私の心では定項 RF のつもりだが、もちろん見たわけではない。定項か否かの違いは、上述の通り、その出来事に対する態度の違いとしか言いようがなさそうである。コトについても、例えば、日露戦争の研究者でそれにこだわりがある場合は、同じくらい研究しやすく、興味深いコトが他にあって、かけがえのなさを感じるだろう。

さて、対象を持つモノ RF でも記述をその ID とするべきか。以下の理由からそれを認めなくてもよいだろうと考えている。「ある RF が“ジッパーを発明した人物“という記述によってその対象に固定されている」ことはそもそも可能ではないと考えるからである。たしかに、「ジッパーを発明した人物」という表現の指示可能性としては、ジッパーを発明していない人は指示できない。しかし、この表現によって導入される RF の同一性については、上述の太郎を殺した犯人 x と同様のことが可能だと思われる。つまり、その人物についていろいろ考えて人物像を膨らませた後に、ジッパーを発明したという内容特徴を取ることが可能だろう。ID x の場合、ある時点（例えば、太郎殺し犯人 RF を作った時点）においては記述が ID かのよう機能しているように見えることがありそうだが、時間とともにそうではなくなることがある。そうだとしたら「ある RF が“ジッパーを発明した人物“という記述によってその対象に固定されている」ことは不可能ということになる。従って、その記述を内容 ID とはみなせない。その記述を内容 ID とする理論化の方向もあるかもしれないが、とりあえずはそうしないでよりシンプルな理論化の方向を追求したい。

ここで、“ジッパーを発明した人物”という記述で RF を作った時点だけが問題なのだと考える人がいるかもしれないが、そもそもモノの同一性は変化を仮想的にでも考慮に入れなければ検討できない概念だと考える。そのため、何が ID を成すかについても、変化を考慮に入れる必要がある。「ジッパーを発明した人物」という名詞句の意味を文脈から独立に考えれば、ジッパーを発明したという内容特徴を取り去ることは考えられないかもしれないが、そもそも RFT では、文脈独立の名詞句にコード化された意味を文脈に入れることで RF の中身が得られる、という方向では考えない。特定の文脈において使用された名詞句に対応する RF の方がプライマリーであって、その RF からその内容特徴がなくなっても RF の同一性が保たれることがあれば、「ある RF が“ジッパーを発明した人物“という記述によってその対象に固定されている」ことは不可能と考える。

以上で、下のコメントにも答えたことになると思います。※descriptive thought とは、a thought employing a definite description concept the F (*Concise Encyclopedia of Philosophy of Language and Linguistics*, p. 536, Elsevier Science. Kindle 版.)と理解しました。自由変項 x を含んだ記述を ID のうちに納めなければならない、ということはないということになります。

---

“内容特徴であるから、世界最軽量でなくなっても機種の同一性に影響はない。”（論文本文 2.3.3）

---

内山 この箇所を読むと、自由変項 ID を持つ RF を definite description に対応させるという、上のコメントでたてた仮設は成立しないような印象を持ちます [山泉 Right. 上の犯人 RF の話参照 ただし、パソコン RF は定項 ID]。対象の、すなわち RF の同定に関わるのは ID の内容のみであり、特徴に納められる内容は関与できないように思われる<sup>◆1</sup>からです [山泉 yes]。逆にいうと、descriptive thoughts を RFT において捉えるためには、自由変項 x を含んだ記述を ID のうちに納めなければならないのではないのでしょうか<sup>◆2</sup>。翻って変項 x だけを ID として 持つ RF を考えると、それが同定されていない対象に対応するとはどういうことかなのか、さらにその理解が難しくなるように思われます。

山泉 上の点線部に対する私の返答に対する下の再コメントにも答えたことになると思います。

- ◆1 山泉 RF の同定というのがどういうことなのかよくわかりません (心に RF を持っている人にとっての RF の同一性?)。分析者が客観的に、ある心のある RF の同一性を判断するとしたら、それは ID が同じかどうかによります。

※追記 心において ID が同じとは、長期記憶のアドレス云々の話で、外部世界との対応関係の話ではない。外部世界との対応関係はこの視座からはどうやっても出てこない。

ID a (ONT モノ) の RF を持ったことがある人が、知覚した対象にその ID の RF を結びつけるかどうかは、基本的に内容特徴によります (トンネル効果の場合も、時空間的な連続性がある)。当然 “間違える” こともあります。(RFT は、世界の描像 (客観的な存在論—意味論—認識論があつて～)ではなく、人間のやっていることの、いわば認知科学に基盤のある観念論的記述です。存在論も、客観的実在の仮説ではなく、認知形而上学です。)

ID a (ONT コト) の RF を持ったことがある人が、見聞きしたコトにその ID の RF を結びつけるかどうかは、内容特徴だけでなく、内容 ID の内容にもよります。(※追記:たとえば、ある出来事のある視点から見ていた人が、その出来事を別の角度から撮影した映像を見た場合に、その映像に映っている出来事を知っている出来事と同定するかどうか)

- ◆2 山泉 記述と関わりが深いものに、ID x の場合だけでなく、PC のように[-token]の場合もあり、ID a[-token]の場合は、自由変項 x を含んだ記述を ID のうちに収める必要はないと思います。また、上の犯人 RF の話にあるように、ID x の場合も、ID のうちに x を含んだ記述を含める必要はないと思います。ID ϕ の場合は、ID のうちに ϕ を含んだ記述を含める必要がありそうです。

追記: [-token]の RF が、ID 定項[+token]の RF からの抽象化で得られている場合、ID はおそらく定項になるので、記述が ID に入ると考える必要はないのではないか。

内山 「対象の、すなわち RF の同定に関わるのは ID の内容のみであり、特徴に納められる内容は関与できないように思われる」でいう同定とは、何かによって RF の同一性を判断するというような認識論的なものではなく、むしろ何かによって RF の同一性が保たれるというような存在論的な意味で用いま

した（ただし RF の本性上両者がどこまで分離できるのか疑問ではありますが）。[※山泉 分離できない気がする]以上の意味で RF の同一性に関わるのは ID だけという理解は恐らく正しいと思われます [山泉 yes]。Descriptive thoughts についてですが、上記の再コメントから明らかなように、存在範疇が何であるかに関わらずやはり記述を ID のうちに含める、すなわち内容 ID を仮定する必要があるように思います（上記のとおり、その場合値が null でない限り定項をとるのかあるいは変項をとるのかが問題になります）。犯人 RF のケースは、記述による ID が不要であることを示す反証にはならないように思われます。上述したように、その指示が記述によって固定されておらず、descriptive thoughts を示す事例ではないと思われるからです（むしろその指示が因果関係によりある特定の人物に結び付けられていると考えられるため、singular thoughts を示す事例であるように思います）。

#### 4. 出来事などの状況に対応する RF の持つ ID、内容 ID について

---

“たとえば、出来事などの状況に対応する RF の持つ ID は、内容 ID というものである。状況は、内容によって同定されるので、内容そのものが ID を成すということになる。”

(コメントを受けた草稿 2.3.3)

---

内山 出来事 (event) も singular thoughts あるいは descriptive thoughts の対象と考えられるので、上記の一般的な ID の種類（定項あるいは自由変項）で処理できるようにも思われる（その場合、ここで内容 ID としてあげられた記述は内容特徴に落とし込まれる）のですが、それとは別の仕様を出来事 RF の ID に求めるのはなぜでしょうか。RF の同一性を左右する ID を内容が担った場合、それは対応する表現を使用する話者にあまりに過大な理知的要求を課すことにならないでしょうか（たとえば、“松坂の一夜”についてそれほど正確に知っている人がどれだけいるでしょうか）。また、それに伴い、同一の RF を共有することが困難となり、それにも関わらずコミュニケーションがいかに成立するのか説明する必要があるのではないのでしょうか。（たとえば、“松坂の一夜”の正確な日付を知らない人は、知っている人とタイプの異なる RF を対応させていることになるので、二人が同じ対象について話していることの保証はどのように確保されるか説明が求められるのではないのでしょうか。）

山泉 内容 ID の RF にも定項と自由変項の区別はあります。※ID x[+token]の出来事の例：「ある出来事をきっかけに、世界は変わった」と聞いたときの「ある出来事」RF@聞き手。

「ここで内容 ID としてあげられた記述は内容特徴に落とし込まれる」ということは、ないと思われます。というのも、〈太郎が a を知っている〉や〈次郎が a を知らない〉ということは、出来事の同一性には関わりのない内容特徴なので、それと内容 ID の内容は区別する必要があるからです。※もしかしたら、どちらも内容特徴として、内容 ID の内容としているものは、内容特徴の中にその RF の ID が入らないものと考えられることはできるかもしれない。

物体や人物についても、それについて詳しい人と少ししか知らない人が問題なく話をできるので、出来事についても、詳しい人とそうでない人が話をできることを特別に問題視する必要はないと思います。

「二人が同じ対象について話していることの保証はどのように確保されるか」：全く保証はなく、お互いに同じ対象について話をしていると思っただけです。場合によっては、話し手と聞き手で内容 ID の中身が矛盾していてそれを互いが分かっていることもあり得ます（南京事件とか）。

**内山** 上記の再コメントからもわかるとおり、内容 ID を持つ RF は、その指示対象が記述によって固定されていると理解できるかと思います。これは、本文中の“例えば、「松阪の一夜」という名前  
で知られる出来事は、1763 年 5 月 25 日、伊勢松阪の新上屋にて、賀茂真淵と本居宣長が国学研究  
について生涯に一度だけ語り合ったという内容で同定され、この出来事に対応する RF の ID は下線  
部で記述されるような内容である”という主張と整合性のある理解といえるでしょう。ただし、私た  
ちがある出来事について話すとき、その対象がこうした仕方  
で記述によって定まっている考えられるケースは、不可能ではないにしても、どちらかといえば稀ではないでしょうか。例えば、新しい  
証拠により「松阪の一夜」がその内容 ID にある日付や場所  
で起きた出来事ではなかったことがわかったとしまし  
ょう。そうした場合でも私たちは通常出来事の同一性、すなわち対応する RF の同一  
性を失うことなくこの新たな知見を処理するでしょう。これはその RF の指示対象が内容 ID によ  
って、すなわち記述によって固定されているとしたら不可能ではないでしょうか。むしろ、こうした  
ケースは上記コメントで取り上げられた“太郎を殺した犯人”のケース（太郎が自殺であったとして  
も、当該の RF はその同一性を保つ）と相似的であり、両ケースとも、当該の RF は純粋な（内容 ID  
の一部ではない）変項 ID（あるいは定項 ID？）を持つとするのが自然な解釈であるように思いま  
す。そう考えるとやはり、出来事 RF とモノ RF をその ID の特殊性によって区別する必要はないよ  
うに思われます。両者ともすべての ID の種類、すなわち定項 ID、変項 ID、内容定項 ID、内容変項  
ID、（おそらく IDnull も）を取ることができると考えられるからです。

また、モノ RF において私たちがその対象について極めて曖昧で貧弱な知識しかもたないのにも  
関わらず対応する RF を持つことができ、互いにコミュニケーションできるのは、その対象を純粋  
な（内容 ID の一部ではない）変項 ID（あるいは定項 ID？）によって定めることができるからか  
と思います。同様なことが出来事 RF でも可能であり、その限りで確かに後者を“特別に問題視する必  
要はない”のですが、そのためにも後者も前者と同様に純粋な変項 ID（あるいは定項 ID？）を持つ  
ことができると認める必要があるように思います。

#### 山泉（再応答）

以下は、これまで考えていなかったことを含みますが、コトの RF の ID は自由変項（例「いいニュー  
ースがある。」の下線部に対応する聞き手の心の RF）のものも定項のもの（例 松阪の一夜@私の心）  
も、何らかの内容があります。その内容が先立って、内容によって、定項になるか自由変項になる

かが決まると考えるのがよさそうです。どうなると定まるのかの詳細は今後の課題とします。「君についてのいいニュースがある。」でもまだ聞き手の心では自由変項だと思います。

「あまりに過大な理知的要求」ということがよくわかりませんが、どうやら「内容 ID」「記述によって固定」でイメージしていることと、私の考えていることが違うように思われます。たしかに、内容そのものがコト RF の同一性を決めるということをそのまま受け取ると、内容が少しでも変われば、もはや同一性は無いということになりますから、「内容 ID」という言い方は誤解を招くかもしれません。おそらく、私の考えているものの方がルーズなものです。

内容に多少の増減・変更があっても、RF の同一性は保たれ得ると考えています（この同一性は、認知的なもので、客観的に決められるものではなく、言ってみれば感覚の問題です）。内容に多少の増減・変更があっても、RF の同一性は保たれ得るのであれば、内容 ID 以外に a や x の ID を設ける必要があります。例えば、松阪の一夜について考えると、日にちが丸一日ずれただけなら、同一性は保たれそうですが、場所が松阪でもなく、時間も夜ではなかったとわかったら同一性が少しあやうくなりそうです。（名前に入っていることの影響が大きいです。もし、「宣長真淵対談」という名前なら、同一性はあまり脅かされないかもしれません）。さらに、参加者が別の人、例えば息子の本居春庭と賀茂真淵だったとわかったら、もはや同一性は無く、別の出来事と認定されそうです。結局、出来事の内容のどの部分が出来事 RF の同一性を構成するかの客観的な基準を示すことは難しく、認知形而上学の実験的な問題になります。ID が null 値になった場合にも、内容 ID の内容を残さないとどんな出来事が無かったのかがわからなくなるので、やはり内容 ID 以外に a、x、 $\phi$  などの ID を設ける必要がありそうです。

同一性を構成する内容とししない内容に二分できるものでもなく、クワインのホーリズム的に、中核的なものと周辺的なものの連続体をなしているのかもしれませんが、何が同一性に関わるかはコンテキストによっても異なりそうです。（氏家・萩澤発表@日本語文法学会 2019 へのコメントでもあったことだが、認知において区別があるということを実験した場合に、個々の事例がどちらに属するのかが客観的に区別できなければならないという反論がよくある。それができるに越したことはないが、できなくても、区別があると思われるのなら、そう主張せざるを得ない。）

このように、何がコト RF の同一性に直結するかがわからなくても、内容特徴とは別に内容 ID を設けるべきと考えるのは、太郎が松阪の一夜を知っている、花子が松阪の一夜を知らない、日本史の授業で松阪の一夜を教わるなどの、どれだけ変わっても RF の同一性に関係のないことがあきらかなものと区別するためです（日本語で表現すると寺村秀夫の外の関係と内の関係の区別にゆるやかに対応しそうです）。モノについてそういう区別があるかと言うと、〈a がレモンである〉と〈a がキウイである〉は同一性に関わりそうだが、トンネル効果の実験（論文の註 7 参照）によると、そこが変わっても認知的に同一性が感じられることがあるので、そのような同一性に関わる内容はなさそうです。そのため、出来事 RF とモノ RF をその ID の特殊性によって区別する必要があると考えています。

以上は一人の心の話でしたが、コトについてのコミュニケーションについて、「同一の RF を共有することが困難となり、それにも関わらずコミュニケーションがいかに成立するのか」という問題は、一つの心における RF の同一性の問題とは区別すべきだと考えます。そもそも、モノについてもコトについても、ID で RF 同士が区別されるのは、一人の心の中の話であり、話し手の心の RF と聞き手の心の RF については、同じかどうか判断するためのものが、甚だ頼りない言語表現以外はありません。同じ対象を話し相手が思い浮かべている可能性に賭けてコミュニケーションは常に行われていると考えられます。客観的にどういうことが成り立っていればそのコミュニケーションが成功するかを述べるのは難しく、例えば、A と B の喧嘩について、話し手は A 側からだけ話を聞いていて、聞き手は B 側だけから話を聞いていた場合、客観的には同じ出来事を思い浮かべていても、表意・推意のレベルでは、コミュニケーションが全く上手くいかないことも考えられます。

また、一人の心の中の話と違ってコミュニケーションにおいては、話し手が言及しているコトについて、聞き手がどのコトの RF に対応させるかを考える際には、ID に入る内容だけでなく、内容特徴に入る内容も大きな役割を演じると考えられます（「話し手はよく知らないみたいだから、あのコトのことかな？」という推論はよくありそう）。話し相手にとって、そのコトの RF が定項か自由変項かも推測しながら話していると考えられます。一人の頭の中で、コト RF の同一性を構成する内容と、コミュニケーションで共有されていると話し手・聞き手が判断している構成内容を分ける必要もあります。なお、以上のコミュニケーションにおける問題は、コトそのものの内容に関わる記述を内容特徴に入れても解決しなそうです。